目標像

世界に誇る「美港」横浜

今後の展開

１　内港地域全体を対象とした誘導

２　既存施策・計画の検討

３　新たな土地利用転換を行う際の景観面への配慮

４　ハード・ソフトの両面で推進する景観形成

景観形成に向けた取組・配慮事項

Ⅰ・ウォーターフロントの軸線を生かした地区・街区の計画とする
・内港地域全体で調和のとれた色彩や形態意匠を誘導していく

Ⅱ・港を感じられる設えを積極的に整備していく
・水への映り込みを意識し、魅力ある夜景を創出していく

Ⅲ・複数の眺望点からの見え方に配慮した形態意匠を検討する
・ゆとりを持った配置とし、建て詰まった印象となることを防ぐ

Ⅳ・新たな眺望点を積極的に生み出していく
・眺望点を広く認知してもらうよう周知、ＰＲを行っていく

Ⅴ・地区の記憶を伝える要素を積極的に保全活用していく
・地区の個性やストーリーを積極的に発信していく

Ⅵ・景観要素が引き立つよう周辺の建物等についても配慮する
・産業景観や夜景などを積極的に発掘していく

Ⅶ・地区の個性に基づいた景観形成方針を定め、整備を行う
・地区の目標等に応じて、効果的な景観形成施策を検討する

Ⅷ・市街地から港へ向かう軸を設け、見通しや風の道を創出する
・水際・海上空間を活用した実験・取組を積極的に推進していく

景観要素

４　景観を形成する主な要素
・新旧の建物が一体となった街並み　・大規模な倉庫群やクレーンなどの産業景観

５　眺望点
・高さや位置の異なる多様な眺望点が存在　・眺望点が同時に景観要素にもなる

６　賑わい
・水際のオープンスペースを活用した取組　・形成されつつある「生活の場」としての港

3-1　景観形成のテーマ

Ⅰ　水際空間、緑の連続性を大切にする

横浜市ではこれまでウォーターフロントの軸線を重要な都市軸として位置づけ、連続する水際空間や緑地を創出してきました。港から市街地にかけてなだらかな地形が続いている内港地域において、リング状の構造から作り出される連続した水際の緑地は、都市景観と海面、空に加えて重要な景観要素の一つとなります。今後も水際空間や緑地の連続性を保ちながら拡大していくことが重要です。

Ⅱ　水際空間を魅力的にする　～水際空間への意識誘導～

内港地域は国内の他都市と比較しても市民が港に近づける空間が多く、また都市部には水際線に沿ってプロムナードが形成され、魅力的な水際空間を演出しています。水際空間には人々が行き交うオープンスペースや歴史的な建造物、高層の建築物、工場やふ頭などの景観要素が数多く存在し、それらが連なって緩やかに変化する景観を形成しています。この魅力をさらに伸長し水際空間を魅力的にしていくことが重要です。

Ⅲ　眺望点、船上からの景観を意識し、魅力ある景観を創る　～眺望景観への配慮～

内港地域には、高い場所や水際、海上など様々な種類の眺望点が数多く存在します。同じ場所であっても、それを望む眺望点によってその表情が変化することも内港地域の魅力です。

また、船やシーバスを利用した海上の眺望点は、超高層の街並みや山手のまとまった緑を背後に持つ市街地と水際空間が一体となった景観や、空と海と港湾施設によるダイナミックな横浜の港らしい景観が望める眺望点です。陸からだけではなく、これら海上の眺望点からの景観も配慮し地区や施設を整備することが重要です。眺望点からの景観を意識し、どのように見えるかを十分に検討することで魅力的な景観を創りだしていきます。

Ⅳ　眺望点を大切にする　～眺望点の保全・創出～

内港地域では、多くの地点から多様な景観を望むことができます。港の見える丘公園や高層の建築物など、高い位置からの眺望点からはなだらかに広がる連続した水際の景観や歴史的建造物、高層建築物と港湾機能が一体となった港の景観を俯瞰することができます。また海上からはまとまった山手の緑や、港湾施設など陸上からとは異なった景観が望めます。さらには、それぞれの眺望点や行き交う人々や活動も同時に景観要素の一部となっています。これらの眺望点を大切にし、また新たに眺望点となる場所を整備していくことで、内港地域の魅力をより感じられるようになります。

Ⅴ　新しい都市と歴史ある街並みの景観を生かす

地形がなだらかで、背景となる自然要素が少ない内港地域においては、建造物が中心となって景観が形成されています。開港時代からの歴史を継承する歴史的建造物や横浜のスカイラインを形成する高層建築群、港らしさを強く印象付ける倉庫群やガントリークレーンなど、様々な時代や用途の建造物が一体となって構成される景観こそが横浜の港らしさであるといえます。今後も新旧それぞれの街並みを生かし、それぞれの街並みが調和する都市景観を創り上げていくことが重要です。

Ⅵ　港を形成する多彩な景観要素を守り、創りだす　～既存要素の保全・魅力化～

建物によって形成される景観が多く、また多くの眺望点からの景観が望める内港地域においては、魅力的な景観要素を自分たちの手で守り、増やしていくことが重要です。これまでも、内港地域では開港からの歴史を伝える建造物や、港湾機能の記憶を残す施設を積極的に保全活用してきました。今後も、引き続き新しく建設される建物に対しては、周辺の景観や地区の特性、景観資源と調和するよう計画を行うことが横浜の港らしい景観を創り保つために必要不可欠といえます。また、時間や季節によって異なる景観も横浜港の多面性を表しており、「夜景」も重要な要素です。昼だけでなく、夜の街並みも魅力的なものとなるようまちづくりを進めることが重要です。

Ⅶ　地区ごとの特徴に応じた景観を創る　～エリア全体の調和～

内港地域は、形成過程や特徴が大きく異なり、その用途や訪れる人々も千差万別な地区が集まってリング状の構造を形成しています。今後も多くの計画によって長期的に続くまちづくりにおいて、地区の利用形態や利用者が変化していく中でも、地区の歴史を踏まえた個性を大切にしながら計画を推進し、様々な機能を持つ地区が調和する景観を創りだしていくことが重要です。

Ⅷ　市民が港を感じ、活動し、近づける空間を増やす　～海上空間の活用～

水際線が市街地として開発されたことをきっかけに、水際空間の整備や観光船の増加が進み、また住宅も増加するなど、現在、市民と港の距離は一層近くなっています。水際のオープンスペースや海上は、人々が内港地域の景観を望む絶好の場所になると同時に、活動・生活している人々も景観要素の一つになり、その賑わいも横浜の港らしい景観を創りだしています。今後もこれらの空間を積極的に創り出していくことが重要です。

3-2　４つの視点

≪視点１　リング状の港の構造を生かした景観の形成≫

内港地域は、内水面をそれぞれ形成過程や歴史の異なる様々な特徴を持った地区がリング状に取り囲んでおり、この構造によって、他都市にはない横浜の港らしい特徴的な景観が形成されています。

この特徴を生かしてさらに魅力的なものとしていくため、都心部に隣接した豊かな水辺の環境を市民が利用できるまちづくりを進めるとともに、地区ごとの機能や景観がリング状につながる都市構造の形成を目指します。

≪視点２　誰もが美しさを感じる景観の形成≫

内港地域における「誰もが美しいと感じる景観」とは、港自体が有する機能の美しさと都市の風景が一体となり、さらにこれらの景観をより魅力的に見せる「要素」を有していることであると言えます。

「海」「港湾機能」「都市」「緑」「空」「船」などが一体的に美しく見えるよう、統一感のある色彩や形態の誘導を行い、それらを望む眺望点や快適な歩行者空間を積極的に守り、創っていきます。

≪視点３　横浜の港らしい特徴的な景観の形成≫

内港地域は形成過程や歴史の異なる、様々な特徴を持った地区から成り立っています。また、歴史的建造物や土木遺構、水際に広がる緑地や地区のシンボルとなる建造物、更には人々の賑わいや夜景など、見る場所や時間によって異なる多彩な景観要素が存在しています。

これら横浜のイメージを形づくる地区や景観要素を大切にしつつ、新たに生み出していくことで、他にはない横浜の港らしい景観を形成していきます。

≪視点４　人々の生活・活動による賑わい景観の形成≫

内港地域では、みなとみらい 21 地区や関内地区を中心に、港と都市機能が融合し、市民に開かれた水際線が形成されています。更には、海をより身近に体感できる船も海上の賑わいを演出しており、近年は豪華客船から市民イベントによる小型船など、その種類も数も増えつつあります。また、活発な物流機能や生産機能そのものも、港の賑わい景観を形成する重要な要素です。

人々の営みによって生み出される景観を内港地域における重要な景観要素としてとらえ、賑わいの創出に向けた取組を積極的に推進していきます。